

令和 6 年度 学校評価シート

学校名：和歌山県立きのくに青雲高等学校（通信制課程） 校長名：宮本 裕司

目指す学校像・育てたい生徒像（スクール・ポリシー等に基づいて記載する）

・生徒の抱える様々な課題解決を支援し、生徒自身の自己肯定感や自己有用感を高め、地域社会に貢献でき、自らも幸福な生活を営むことができる力を育成する学校

・生涯にわたって自ら学んでいけるような学習意欲や態度を身につけた生徒

・自ら考え、決定し、行動する資質・能力を培い、社会に貢献する力を身につけた生徒

・社会においてより良い人間関係を築くために必要なルールやマナーなど社会性を身につけた生徒

・協調性やコミュニケーション能力を身につけた生徒

学校評価の公表方法

本校ホームページに掲載

現状・進捗度	A	十分に達成している。（80%以上）
	B	概ね達成している。（60%以上）
	C	あまり十分でない。（40%以上）
	D	不十分である。（40%未満）

自己評価（分析、計画、取組、評価）							
番号	計画・取組				評価		
	重点目標	現状	具体的取組	評価項目と評価指標	進捗度	進捗状況	今後の改善方策
1	学力の向上に向けて、「自学自習」を基本とし、個々に応じたきめ細かい学習計画を立て、多様な生徒に対応した学習指導を行う。	B	・生徒の学習の進捗状況を把握し、適切な個別指導を行う。	・多様な生徒に対応できる教育の創造に取り組んでいるか。（授業アンケート項目における「自学自習において各自の進捗に応じて、わかりやすく説明してくれる」において、A 評価 100%	B	授業アンケート「自学自習において各自の進捗に応じて、わかりやすく説明してくれる」において、A 評価が 68.8%	学習指導の面では、評価指標の水準を昨年より引き上げたため、進捗状況は B 評価となっている。しかし、肯定的な評価（A・B 評価）に注目すると、その割合は昨年と同様に高水準を維持している。今後も現状に満足することなく、生徒に寄り添った指導を一層継続していく。 一方で、単位修得率は依然として低く、高評価の学習指導を十分に活かしきれていない。今後は、生徒一人一人の適性に応じた受講計画の丁寧な指導に努めるとともに、スクーリング出席の促進やレポート提出の支援にも力を入れていく。
			・生徒が興味・関心・意欲をもって学習が進められるよう、丁寧な添削、個々に応じたスクーリングなど指導内容の充実に努め学力の定着に取り組む。	・わかりやすいスクーリングを目指し、学習内容の精選と充実に努め、学ぶ楽しさが実感できるようにできているか。（授業アンケート項目における「授業はわかりやすく、充実した指導を行っている」において、A 評価 100%	B	授業アンケート「授業はわかりやすく、充実した指導を行っている」において肯定的 A 評価が 66.8%	
			・未登録の生徒や学習進度の遅い生徒に対して学習を促す。	・生徒とのコミュニケーションを深め、積極的な学習を促す。（講座登録率 80%以上、1 人当たりの単位修得率の平均を 60%以上）	B	講座登録率について、約 30%の生徒が未登録であり、登録者について、1 人当たりの単位修得率の平均が 35%。（単位修得率＝修得単位/登録単位）	
2	生徒の自主的・主体的な学習態度を育成し、社会とつながる学習の充実を図る。	B	・自らの将来について真剣に考えさせ、他機関とも連携しながら個々に応じた進路指導を充実させる。	・進路に関する情報提供を充実し、進路意識や勤労観を高め、将来への希望や夢を育てているか。（学校評価アンケートにおける項目「進路についての情報を知らされているか」及び「将来の進路や生き方を考える機会があるか」において A 評価 70%以上）	B	学校評価生徒アンケート「進路についての情報を知らされているか」A 評価 41%、「将来の進路や生き方を考える機会があるか」において A 評価 47%	進路情報の提供や進路意識、勤労観を高める取り組みについては、評価指標の水準を昨年より引き上げたため、進捗状況は B 評価となっている。しかし、肯定的な評価（A・B 評価）に注目すると、その割合は昨年と同様に 80%以上を維持している。また、学校行事については、今年度から文化祭での模擬店を解禁し、修学旅行の行き先を県外にするなど、行事活動の魅力向上を図った。これに伴い、行事への参加者も年々増加傾向にあり、学校の活性化につながっている。 一方で、「生徒会活動や部活動への取り組み」に関するアンケートの数値は高くない。これは、全日制とは異なる通信制課程の特性上、やむをえない課題ではあるが、引き続き、これらの活動について、生徒の積極的な参加を促し、自主的・主体的な学習態度の育成に努めていく。
			・自己実現に向けて前向きに捉える意識を育て、生徒の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培う。	・社会とつながる学習の推進を図れているか。（就職担当による企業訪問数が 520 社以上及び職場見学率 100%）	A	就職担当の企業訪問数は約 420 社であり、様々な企業との連携はできている状況にある。そのため、生徒の適正にマッチングした就職を斡旋できている。また、就職希望者の応募前職場見学の実施率は 100%である。	
			・スクーリングや各種学校行事を通じ、基本的生活習慣の確立を図ると同時に社会性を養い、生涯にわたって自ら学ぶ姿勢を醸成する。	・クラブ活動や学校行事等への積極的な参加を促せているか。（学校評価生徒アンケート項目において「役に立つ様々な生活体験ができているか」及び「生徒会活動や部活動に積極的に取り組んでいるか」において、肯定的（A,B）評価 100%	B	学校評価生徒アンケート「役に立つ様々な生活体験ができているか」において肯定的（A,B）評価 70%、「生徒会活動や部活動に積極的に取り組んでいるか」において肯定的（A,B）評価 55%	

学校関係者評価

学校関係者（外部）へのアンケートは、学校運営協議会の委員および同窓会役員に依頼している。学校運営協議会は年間 4 回、本校で開催し、現状を伝えるとともに、生徒との交流の機会も設けた。また、同窓会役員会も年間 5 回、本校で実施した。いずれの委員も、本校の状況をある程度把握した上で回答できたと考えられる。評価は概ね高かったが、「保護者や地域の意見が取り入れられているか」を問う項目は、前年より低評価となった。今後は、「保護者と語る会」などの参加者数を増やし、寄せられた意見を反映させるとともに、その成果を周知していく。

生徒の学校評価については、単年度の比較だけでなく、経年変化も考慮する必要がある。この視点で見ると、肯定的な評価は年々増加しており、授業評価についても、ICT 関連の項目を除けば例年高評価を得ている。

保護者の学校評価では、各項目に多少の増減はあったものの、大きな変化はなかった。今後も、生徒・保護者の評価を経年変化の観点から分析し、年度ごとの結果を丁寧に確認していく必要がある。

教職員の学校評価では、全項目で肯定的な意見が多く、A 評価の増加が顕著であった。

3	地域や保護者との連携を密にし、開かれた学校づくりを推進するとともに、生徒の生活実態を把握し、学習活動を高める	B	・SC、SSWを活用するとともに、外部機関と連携を強化する。また、若者サポートステーションにおける校内相談窓口の活用推進を図る。	・個々の生徒に応じたきめ細かい指導の充実を図れているか。（SC、SSW 及びサポステ相談会の活用率を 100％）	B	勤務日における SC と SSW の稼働率及び SSW の会議参加率 100％、サポステ相談会の活用率は 35％	SC・SSW と連携を密にすることで、生徒一人一人への学習支援を効果的に行うことができた。一方で、サポステ相談会の活用率は 35％にとどまっており、生徒や保護者への周知を強化し、さらなる向上を目指す。また、保護者懇談月間や「保護者と語る会」の参加者数は目標に達していないため、来年度は一層の周知を図る。なお、ホームページの閲覧数は大幅に増加しており、今後も Web システムを活用した広報活動を強化していく。
			・オープンスクール、保護者懇談月間、保護者と語る会等を実施する。	・家庭や地域、関係学校や機関との連携を密にし、本校についての情報を提供できているか。（オープンスクール 160 名以上、保護者懇談月間 50 名以上、保護者と語る会 20 名以上）。また、学校評価生徒アンケート「保護者等と情報交換したり、協議したりする機会を設けているか」において肯定的（A,B）評価 80％以上。	B	オープンスクール 133 名、保護者懇談月間 42 名、保護者と語る会 13 名、また、学校評価生徒アンケート「保護者等と情報交換したり、協議したりする機会を設けているか」において肯定的（A,B）評価 67％	
			・校報やホームページ、マチコミメール等による広報活動を充実させる。また、中学校や他の高等学校等に対して必要な情報を提供する。	・さまざまな機会を利用して情報の発信を行えているか。（ホームページ閲覧数 8 万回以上、ユーザー数 10000 人以上、マチコミメール配信数 40 回以上、ホームページ更新週 1 回以上）	A	令和 6 年度ののホームページ閲覧数 11 万回、ユーザー数 1.5 万人、マチコミメール配信数 40 回、ホームページ更新週 1 回	
4	・ICT を積極的に活用し、生徒の情報活用能力の育成及び教職員の業務の効率化を図る。	C	・教員が、スクーリングにおいて ICT を活用した授業を実施する。	・教育効果を上げるために、ICT を活用しているか（授業アンケート項目「スクーリングで ICT 機器を使用するときがある」において、肯定的（A,B）評価 90％以上）	B	授業アンケート「スクーリングで ICT 機器を使用するときがある」において肯定的（A,B）評価 54.7％	スクーリングにおける ICT 機器の活用率は、授業アンケートの結果から依然として低いことが分かる。通信制課程のスクーリングでは、自宅学習に必要な基礎的な知識の指導や、生徒ごとの学習課題に応じた個別支援を重視しているため、ICT の効果的な活用が難しい状況にある。 今後は、通信制課程の研究会などを通じて、全国の ICT 活用の効果的な事例を研究し、活用の可能性を探る。また、校務の DX 化は昨年から徐々に進み、職員の業務改善につながっている。今後もさらなる推進を図る。
			・ICT を活用し、教職員の業務の効率化を図る。	・業務の効率化を図ることで、生徒への対応時間をより多く確保することができているか（校務の効率化アンケート項目「自己目標をもち子供と向き合う時間の確保ができているか」において、「達成できた」の割合が 90％以上）	B	校務の効率化アンケート項目「自己目標をもち子供と向き合う時間の確保ができているか」において、「達成できた」の割合が、55％	
			・ICT の活用に関する情報提供を行うとともに、生徒の情報活用能力の向上を図る。	・ICT を活用することで、生徒の主体的な学びを促進できているか（授業アンケート項目「スクーリングやレポート作成で生徒がコンピュータを活用する機会がある」において肯定的（A,B）評価 90％以上）	C	授業アンケート「スクーリングやレポート作成で生徒がコンピュータを活用する機会がある」において肯定的（A,B）評価 38％	

ICT 教育や校務の DX 化については、昨年度に導入した会議資料のペーパーレス化や、本年度から開始した予約申請のオンライン化により、担当教職員の業務負担が大幅に軽減された。また、昨年度から研究を進めているリポートの電子化についても、実施に向けた検討を継続している。今後も、ICT 教育のさらなる推進と校務の DX 化に努めていく。